

ティーチング・ポートフォリオ

大学名	湘南医療大学
所 属	薬学部
名 前	小野塚 真理
作成日	2025. 05. 29

1. 教育の責任

湘南医療大学薬学部教育理念は、グループ全体の理念「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」に基づき、人間の生命や尊厳を理解できる豊かな人間性と「薬学の医療専門職」としての知識・技術を習得して、保険、医療、福祉、教育の幅広い分野で地域の健康増進・公衆衛生を支え、寄与・貢献できる医療人を要請することである。

本学部の教育目標は学生が次の5つを身につけることとしている。

1. 人間及び生命への尊厳を理解し、医療人としての幅広い教養と科学的・論理的思考力および、生涯学び続ける基礎的な知識と研鑽及び態度
2. 患者に質の高い薬物治療を提供できるように医師など多職種と連携したチーム医療に必要なコミュニケーション能力
3. 薬学基礎知識・技術を用いて問題を発見し解決するために、医療現場における薬剤師に必要な診療支援能力
4. 薬学、医療の進歩と改善に資するための研究マインド
5. 地域の健康増進や公衆衛生について科学的根拠に基づいた問題発見・課題解決能力

これらを踏まえ、最適な薬物治療を遂行するために必要な薬学的知識や技能だけでなく、医療人として幅広い視野と柔軟な思考を兼ね備えた薬剤師を育成することを目指している。

担当科目(2025年4月現在):

薬剤学Ⅰ・Ⅱ(医療薬学科 必修、3年次 前・後期)

薬物動態学Ⅱ(医療薬学科 必修、3年次 後期)

教育活動:

2学年チューター(担当学生11名):定期試験前後の個人面談(全員)、保護者会における保護者面談(希望者のみ)

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私が担当する薬剤学は、薬物を剤形という形で設計・製造し、適切に投与することで最大限の治療効果を得るための、薬学ならではの重要な分野である。薬剤学は学際的な学問であり、物質科学や生命科学をはじめとする幅広い基礎知識の理解が不可欠である。この分野で修

得した知識や技術は、薬物動態学、調剤学、および薬物治療学へと発展し、さらに 4 年次以降の事前実務実習や病院・薬局での臨床経験にもつながる。

私は、これらの関連科目との一貫性を意識しながら、講義設計において常に実践力の育成を重視している。学生が医療人として臨床現場に立ったときに必要となる基盤的な知識と考える力を養うことが、私の教育における中心的な目標である。

2) 理念をもつに至った背景

情報技術の発展に伴った医療分野のデジタル化においては IoT、クラウド、AI を活用した医療サービスが提供され、薬剤師の在り方がこれまでと大きく変化している。また、生命科学の急速な進歩に伴い今後も医療は高度複雑化していくことから、薬剤師には薬物治療について他の医療専門職との直接的な話し合いを行うと同時に、患者自らが薬の使用に関する意思決定を行えるように患者への適切な情報の提供や、その意思決定への支持と理解がさらに一層求められている。薬物は疾病の予防、診断、治療を目的に使用されるが、そのリスクとベネフィットは表裏一体である。物理・生物薬剤学的視点から、医薬品の物性を理解した上で、個々の患者に適した処方(製剤設計)を行うことは、医療の現場において、薬剤学および薬物動態学を習得した薬剤師の本領が発揮できる分野であると考えている。またこのことは、患者の意思決定を尊重する「コンコーダンス」の概念に基づいた薬物治療の実現においても非常に重要であると考えられる。薬剤学は薬物動態学と併せて薬学教育の中でも基礎薬学から臨床薬学へとつながる重要な位置にある科目であり、薬剤学の幅広い知識と技術を兼ね備えた薬剤師の育成が必要であると考えている。

3. 教育の方法・戦略

方法

薬剤学、薬物動態学の講義は教科書を中心とし、補助資料として独自に作成した講義プリントを使用している。毎回の授業の最後には、学んだ内容の理解度を確認するために小テストを実施しており、内容は穴埋め、誤記訂正、正文選択問題などを組み合わせた構成としている。また、国家試験の過去問題も適宜取り入れ、実践的な演習に慣れるよう工夫している。小テストは 15 分程度で行い、終了後すぐに解答と解説を提供することで、学生はその場で自己採点を行う。採点済みの答案は一旦回収し、教員側で理解度を確認したうえで、次回授業時に返却している。講義後は、復習支援として講義プリントと小テストを manaba に PDF 形式で掲載し、各回の授業の冒頭には前回内容の要点を 5 分程度で復習している。成績評価は小テスト(20%)と定期試験(80%)をもとに総合的に判断している。

方針

薬剤学では物理学・物理化学を基盤とし、「薬物と製剤材料の物性に関する基本的知識」を習得する。薬剤学Ⅰ（前期）では、患者が「医薬品」をより良い状態で使用できるように、設計・製造するために必要な概念と知識を学修する。薬剤学Ⅱ（後期）では、「適切な剤形と薬物動態的な特徴を考慮して、個々の患者に合った薬物治療を提供する力を習得する」ため、製剤の種類、製造方法、および品質管理に関する基本的事項（日本薬局方の製剤通則・製剤各条）を習得し、さらに薬物動態の制御法などを工夫したドラッグデリバリーシステム（DDS）などの最先端技術に関する知識を学修する。

予習として教科書の指定範囲を読み込み、授業後は小テストで知識の定着を確認する。また、補講では講義全体の復習や国家試験過去問による演習を行い、実践的な理解を促す。定期試験では総合的な評価を行い、国家試験や CBT を見据えた学修成果の確保を図っている。

4. 学修成果

3年生に対し、薬剤学Ⅰは8月（追再試験は9月）に、薬剤学Ⅱおよび薬物動態学Ⅱは2月に定期試験を実施した。担当講義の範囲についてはすべて試験問題を作成し、いずれの問題も60%以上の正答率を示した。薬剤学および薬物動態学は専門性が高く、難解な概念も多く含まれるため、試験時には約半数の学生が追再試験の対象となった。

しかし、追試験に至るまでの期間に補講を実施し、復習および問題演習を通じて理解を深める機会を設けた結果、最終的に本試験・追再試験を合わせて約90%の学生が合格基準を達成した。補講と個別指導の継続が、理解度向上と学修成果の改善に寄与していると考えている。

5. 改善のための努力

薬剤学は、薬学教育の中でも基礎薬学と臨床薬学をつなぐ中核的な科目であるが、3年次からの専門科目であるため、学生にとっては初めて触れる専門用語や概念も多く、難易度が高い。そのため、講義ではできる限り身近な事例を用い、学生がイメージしやすい形で説明するよう努めている。

また、3年生の学力には個人差が大きいと、理解が不十分な学生には丁寧な解説と繰り返しの演習を行い、必要に応じて個別補習も実施している。一方で、学力が高い学生に対しては、応用的な内容や追加資料の提示などによって、さらに学習意欲を高める工夫を行っている。

6. 今後の目標

短期目標:薬剤学Ⅰ、Ⅱは共に、3年生全員が当該学年で単位を取得することを目指す。
また、学外の模擬試験においては全員が薬剤学分野で70%以上の正答率となるように、
学生の理解度に合わせた講義および個別の指導を行う。必要に応じて、補講および模
擬テストを実施し、学生の理解度の向上につなげ継続的な学修支援を行う。

長期目標:薬剤師国家試験では薬剤学分野での70%以上の正答率、および合格率9
0%以上を目指す。